

広報まるがめ6月号 《ほっとコラム人権》共に支え合う " 幸^{こうれい}齢 " 社会を

若い時に「近頃の若いもんは」とよく言われました。年をとったらとって「いい年こいて」とか「年寄りの冷や水」とか言われるようになりました。何故なのでしょう。人はおおむね自分が正しいと思っているから、自分と「違う」人間をとりあえず否定するようです。若者もいずれ老人となります。そして自分が「同じ」人間であったことに気づくのです。だから、「高齢者問題」は高齢者側の問題ではありません。老人＝弱者というネガティブなイメージを作っている社会全体の問題です。

厚生労働省の推計では、数年で65歳以上の高齢者の5人に1人が認知症になると言われています。認知症になると、物忘れによる失敗やできていた家事・仕事がうまくいかなることが増え、その不安から抑うつ的になり、被害妄想的になったりするなどの症状が現れてきます。判断力や記憶力の低下から社会のルールを守れないことや周りの人に迷惑を掛けてしまうことも少なくありません。そのため、虐待や周囲からの孤立など、人権の侵害を受けやすくなります。

一方で、家族や周囲の人は、認知症の人にどう接してよいか分からず戸惑うことや介護に疲れてしまうことがあります。

認知症になった人、家族、周囲の人、それぞれがそれぞれの置かれている状況で困りごとを抱えているのではないのでしょうか。

市では認知症になってもその人らしく地域で暮らしていけるよう、認知症について学び、認知症の人やその家族を地域で見守る「認知症サポーター」の養成をはじめとして、認知症の人に優しい地域づくりを進めています。特別なことではなく、優しく見守ることやさりげない声掛けが、認知症の人の人権を尊重することにつながっていきます。

認知症を正しく理解し、認知症の人と周りの人がお互いに笑顔で暮らせる地域づくりを進めましょう。